［7］ 小林市小体連

（学校数 12 校　児童数 2,401 人）

Ⅰ　年間事業

回	期　　日	時　　間	会　　名	内　　容	会　　場
1	5 月 6 日(金)	15：30～16：30	理事会	本年度役員選出・事業計画	栗須小
2	6 月 10 日(金)	15：00～16：30	理事会	水泳大会計画検討 研究方針について	栗須小
3	7 月 25 日(月)	14：00～16：30	理事会	水泳大会前日準備	南小
4	7 月 26 日(火)	8：30～16：30	大会	小体連水泳大会・反省	運動公園 南小
5	8 月 29 日(月)	13：30～16：30	理事会	陸上大会計画案検討 研究経過報告	栗須小
6	10 月 18 日(火)	13：30～16：30	理事会	陸上大会前日準備	南小 運動公園
7	10 月 19 日(水)	8：00～16：30	大会	小体連陸上大会・反省	運動公園
8	12 月 2 日(金)	15：00～16：30	理事会	授業研究協議会	栗須小
9	2 月 20 日(月)	15：00～16：30	理事会	年間反省・次年度に向けて	栗須小

Ⅱ　事業部のあゆみ

1　水泳大会

⑴　大 会 名　　第９回小林市小学校体育連盟水泳大会

⑵　実 施 日　　平成２８年７月２６日（火）

⑶　会　　場　　小林市総合運動公園屋内プール

⑷　出 場 者　　小林市内小学校（１２校）５・６年生選抜選手

⑸　実施種目　　自由形・平泳ぎ（２５ｍ・５０ｍ）・１００ｍリレー（自由形２５ｍ×４）

⑹　競技方法　　・　タイムレースとする。

・　出場する種目の距離を完泳できるものとする。

・　出場種目数は１人１種目とする（リレーは除く）。

・　リレーのチーム編成については、小規模校に限り異学年、男女混合でも可とする。ただし、男子チーム扱いとする。

・　その他細部については、小林市小学校体育連盟による競技規則を適用する。

⑺　日　　程　　受　付　８：１０～　８：３０　　開会式　８：４０～　９：００

競　技　９：１０～１２：００　　閉会式１２：００～１２：２０

	種　　目		種　　目
1	６年　女子　２５ｍ平泳ぎ	9	６年　女子　５０ｍ自由形
2	５年　男子　２５ｍ自由形	１０	６年　男子　５０ｍ自由形
3	６年　男子　２５ｍ平泳ぎ	１１	６年　女子　５０ｍ平泳ぎ
4	５年　女子　２５ｍ自由形	１２	６年　男子　５０ｍ平泳ぎ
5	６年　女子　２５ｍ自由形	１３	５年　男女混合１００ｍリレー
6	５年　男子　２５ｍ平泳ぎ	１４	６年　女子　１００ｍリレー
7	６年　男子　２５ｍ自由形	１５	６年　男子　１００ｍリレー
8	５年　女子　２５ｍ平泳ぎ		

⑻　表　　彰　　各個人種目６位、リレー種目３位までを入賞とする。

参加児童全員に記録証を渡す（※標準記録突破者については別途）

⑼　反　　省

○　エクセルでの記録システムを導入し、素早い計算と閉会式での発表ができた。陸上大会での

活用も行いたい。

○　各学校よく練習されており技術向上の見られる大会となった。標準記録突破者も競技によって見られるので、今後は大会記録の更新も達成できるよう更なる指導の充実を図る。

○　平泳ぎでの泳法違反が年々少なくなってきている。一方で、５０ｍへの参加児童が減少しており、指導者も更に指導方法等工夫が必要である。

２　陸上大会

⑴　大 会 名　　平成２８年度小林市小学校体育連盟第５７回陸上大会

⑵　実 施 日　　平成２８年１０月１９日（水）　※　予備日：１０月２０日（木）

⑶　会　　場　　小林市総合運動公園陸上競技場

⑷　出 場 者　　小林市内小学校（１２校）　６年生

⑸　実施種目　　一般種目　　１００ｍ走、５０ｍハードル走

選抜種目　　１００ｍ走、５０ｍハードル走

長距離走（男子１０００ｍ・女子８００ｍ）

ソフトボール投げ、走り幅跳び、学級対抗リレー、学校対抗リレー

⑹　競技方法　　・　競技は全てタイムレースとする。

・　選抜種目については、一人一種目までとする。ただし、800m、1000m、学級対抗リレー、学校対抗リレーは除く。小規模校については配慮をする。

・　その他細部については、小林市小学校体育連盟による競技規則を適用する。

⑺　日　　程　　開会式　　９：４０～１０：００

競　技　１０：００～１４：１０　　閉会式　１４：３５～１５：００

	種　　目		種　　目
1	男子走り幅跳び	7	学級対抗４×１００ｍリレー
2	女子１００ｍ	8	男子ソフトボール投げ
3	女子ソフトボール投げ	9	女子走り幅跳び
4	男子５０ｍハードル	１０	男子１００ｍ
5	男子１０００ｍ	１１	女子５０ｍハードル
6	女子８００ｍ	１２	学校対抗４×１００ｍリレー

⑻　表　　彰　　各種目６位、学級対抗リレー６位、学校対抗リレー３位まで入賞とする。

一般種目１位の児童に記録証を渡す（標準記録突破者については別途）。

⑼　反　　省

○　児童の体調不良や放送機器のトラブルは十分に考えられるため、全理事・全職員が臨機応変に対応する心構えが必要である。

○　各学校とも児童の態度が年々立派になっている。指導を十分できている成果が大会にあらわれている。

○　放送機材を小体連で準備し適切に配置できた。

○　標準記録突破者や大会記録等例年より多く記録が生まれた。日頃の体育学習の成果と大会への各学校の取り組みが発揮された大会であった。

○　児童が１００Ｍという距離を自分の中で組み立てて走り切る力が足りない。学校の運動場で直線１００Ｍをとり、１００ｍの走り方を知り、走る感覚を身に付ける必要がある。

○　ハードルについては、学校差は本年度も見られた。

○　途中雨が降ってきたが、全理事・全職員の協力により、臨機応変に対応することができた。

○　各校が会場に到着する時間や帰る時間によって練習や片付けの負担が偏っているため、公平性が保たれるよう改善策の検討が必要である。

Ⅲ　研究部のあゆみ

1　研究主題

生涯にわたって運動に親しむ資質や能力の基礎を育てる体育学習の在り方
～「わかる・できる・かかわる」を実感させる楽しい授業を目指して～

2　主題設定の理由

現在、私たちを取り巻く環境は大きく変化し、それに伴い子どもたちの生活環境も変化し続けている。テレビ、携帯型ゲーム、カードゲーム等、現代の子どもたちは身体を動かさなくても楽しみを得るための手段をたくさんもっている。また、生活が便利になることで身体を動かさなくてもいい状況も増えてきている。さらに子どもたちの運動不足の直接的な原因として、安心して遊ぶことのできる「時間・空間・仲間」の減少も深刻な問題として挙げられる。子どもたちの中にはスポーツ少年団に入って運動をしている子どももいるが、運動をたくさんする子どもとそうでない子どもの二極化や、運動をしていても一部の運動技能の向上に限られてしまう状況も見られる。このように様々な問題を抱えながら現在の子どもたちの体力は低下しており、体育科学習において運動に親しむ資質や能力を育てていくことが重要な課題であると考え、本主題を設定した。

3　研究の目標

児童の運動に親しむ資質や能力の基礎を育てるために、各領域における「わかる・できる・かかわる」を意識した体育科学習指導の在り方を究明する。

4　研究の仮説

「わかる・できる・かかわる」を意識した学習活動を展開することで、児童が運動の行い方や練習の仕方を知り、児童の運動に親しむ資質や能力の基礎を育てることができるであろう。

5　研究の内容

市内各小学校において「わかる・できる・かかわる」を意識した学習活動の実践を行う。

6　研究の実際

(1)「わかる」ための工夫

「わかる」ための工夫については、各学校ともに授業の導入時に写真や動画などを活用しながらオリエンテーションを行ったり、学習カードやポイントの掲示、ＩＣＴなどを活用して視覚的に捉えさせたりするなどの工夫が多く挙げられた。

【ＩＣＴで技のポイントを確認する児童】

【各学校での実践例】

○　事前指導の工夫	○　資料の掲示・活用
○　場の設定の工夫	○　学習カードの活用
○　運動量の確保	○　ＩＣＴの活用

(2)「できる」ための工夫

「できる」ための工夫については、本時の主運動につながる準備運動を取り入れたり、児童の技能の実態に応じた場の工夫、授業の流れを工夫して運動量を確保したりするなど、多くの実践が行われていた。特に、児童の実態に応じた場の設定や、スモールステップによる技能の向上は、その途中に教師による意図を持った声かけや児童同士による教え合いが行われることで技能の向上につながると考えられる。

【児童の実態にあわせた場の工夫の例】

【各学校での実践例】

○ 主運動につながる準備運動	○ 教材教具の活用
○ 意図をもった声かけ	○ 運動量の確保
○ 相互評価するための手立て	

【場を工夫し、補助をし合う児童】

(3)「かかわる」ための工夫

「かかわる」ための工夫として、小集団による話し合いの時間の確保が多く挙げられた。その際、技のポイントを載せた学習カードやタブレット、デジタルカメラなどのＩＣＴを用いることで、より具体的な話し合いとなっていた。また、友だちにアドバイスするなかで、自分自身の「できる」につながった例もみられた。児童同士のかかわり合いは、相手の技能の向上だけでなく、その児童自身の技能の向上にもつながる効果的な活動であると感じた。

【タブレットをみて話し合う児童】

【各学校での実践例】

○ 児童同士の教え合い	○ 発表の場の設定
○ 話し合いの場の工夫	○ 学習カードの活用

7　研究の成果と課題

(1)　成果

○　各学校での実践によって、「わかる・できる・かかわる」を意識した学習活動を展開することで単元の目標を達成できるとともに、児童一人ひとりの意欲的な活動につながることを確認できた。

(2)　課題

○　今後は、児童同士の学び合いを取り入れた学習の流れを整理していく必要がある。また、ＩＣＴを体育の学習でも活用できるよう、各学校において整備していく必要がある。

Ⅳ　まとめ

前年度から、小体連のメンバーは大きく入れ替わったが、例年と同じように小林市の体育行事を行うことができたことは大きな成果と言える。しかし、課題が残る部分も多いため、引き継ぎを確実に行い、来年度よりよい体育行事や研究ができるようにする必要がある。